
ゲーベルゲルグの夜

一宮咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲーベルゲルグの夜

【Nコード】

N48520

【作者名】

一宮咲

【あらすじ】

ジークフリート王とオデットの娘幼いシルフィンはある夜、部屋で不思議なこうもりを目撃する。それが全ての始まりだった――。
「白鳥の湖」をモチーフにした話。

1（前書き）

「白鳥の湖」をモチーフにしていますが、原型から外れていると思われるかもしれません。夢が壊れるや、ダメそうな人はまわれ右でお願いします。この作品はリハビリのために書いていますので、設定その他がゆるい&不定期あんーど改定するかもと未定だらけですのでご了承ください。

夜は闇から何かが出てくるような怖さがある。

昼間に光によって隠されたものが姿を現すような気がするのだ。

明るい暖炉の火がついて周囲を照らし、近くに乳母のサザンがいれば、とりあえずは恐れる事はないけれど、そのサザンがうとうとし始めると途端に不安になるのだ。

天蓋つきのベッドの上で軽い羽毛布団にくるまれていたシルフィンは、手を伸ばしてベッド脇のイスで居眠りしている乳母を起こした。

「サザン、続きは？ 話の続きは？」

揺り起こされた乳母のサザンは、一瞬ぼけつとした目を泳がしてやっと状況を思い出したようだ。

「ああ、姫様。どこまで話しましたっけね。えーっと」

「いつも気が付くと寝ている。寝ないでよ、サザン。悪魔の城に乗り込んだところからよ」

手のこうで目をこすりながら、サザンは眠そうな顔だ。

「この話が姫様は好きですね。私なんて口にタコができそうに語った気がしますよ」

それを聞いてシルフィンはぶくりと頬を膨らませる。

「だってだって、お父様とお母様のお話なんだもの！ 好きにきまっっているわ！」

甲高い声で叫んだシルフィンをなだめるようにサザンは、やわらかな枕に沈んだ顔をのぞき込み、シルフィンの絹糸のような金髪をなでつけた。

「しっ——、姫様。もう子どもの寝る時間なんですよ。そんなに騒

がないでくださいな。お妃様にサザンが怒られてしまいます。あわれなサザンを思うならば静かにして下さいまし」

まだムスツとしているシルフィンに、苦笑いしながらサザンはあやすように声をかける。

「ほらほら機嫌を直して下さいまし。せつかくのオデット王妃様ゆずりの美しいお顔が台無しですよ。ついでに空を映したようなジークフリート王ゆずりの瞳も閉じて下さいな。姫様が、物語にも伝説にもなりつつあるお二人のお子様なのだから、もちろんお二人の恋物語をお好きなのは知っていますよ。でも今日はもう少し話したら眠って下さいな」

納得いかないシルフィンだったが、サザンの言う通りに目を閉じて、話の続きに聞き入った。その内、サザンの声に誘われるように眠りに落ちていった。

次にシルフィンが目覚めた時、部屋にサザンの姿はなかった。

隣の部屋で休んでいるのだろう。夜の途中で起きてしまうとは今日はついていない。幾分小さくなった暖炉の炎がちらちらとゆれて色々な物の影が揺れている部屋に一人いるというのは心細く、シルフィンはベッドの中で身じろぎした。

目を開くと、影たちの中から魔物が出てきそうで、シルフィンはぎゅっと目を閉じることでやり過ごすことにする。

「目をつぶれば、怖くないもの。早く寝なくちゃ」

と自分に言い聞かせるように、小さくつぶやく。

そうしていたが、なかなか眠りは訪れなかった。逆に目をつぶっているとは怖い幽霊や魔物の姿を思い浮かべてしまって、シルフィンはぱっと目を開ける。

クリーム色の花がらの装飾がある壁も、部屋の隅にある木のおもちややぬいぐるみも、シルフィンの体に合わせたテーブルやイスも、なにもかもが昼間とは違った様相を見せているようだ。特に昼間に

見ると美しい、壁にかけられている御先祖さまの肖像画は不気味に見える。いつ何かつぶやきだしたり、目や顔が動きだしたりしてもおかしくなさそうだった。

なるべくそちらを見ないようにしながら、暗闇の中に目を泳がした。

眠れそうもないし、怖いのでサザンを呼ぼうか考える。

サザンは隣の部屋で休んでいるはずだ。ベッドから左手の乳母サザンの部屋に続く木製のドアは、シルフィンの呼びかけに応えられるように、いつも開きっぱなしになっている。

シルフィンが大きな声を何回か出せば、いかに良く寝るサザンでも起きて来てくれるだろう。

サザンを呼ぼうと口を開きかけた時だった。

ベッドの正面にある夜を映したガラス窓にカッン、カッンと何かがぶつかる音が聞こえて来たのだ。

シルフィンはとうとうお化けが出て来たのかと思い、急いで上掛けの布団を頭からかぶる。

しかし、何が起きているのか知りたい。そろそろと目のところまで布団を下げて様子を伺った。

すると縦に大きなガラス窓がほんの少し開き、暗闇に薄く光る小さい何かが部屋に入ってこようとしているのが見えた。

シルフィンは驚き、息をつめる。

大きさは、料理場にいる肥え太ったねずみぐらいだろうか。

窓枠をひっかくような微かな音とともに、小さな何かは隙間から這い出るようにして部屋へ入って来たようだ。

窓枠の下の台となっている所で、小さなモノは体勢を立て直すと礼儀のわきまえた人間のように開けた窓を閉めた。全身を使って、試行錯誤しながら閉めたようだ。

シルフィンはこれ以上ないという慎重さで、小さなモノに気付かれないよう様子をうかがう。

小さなモノも同様な心境だったのか、首をめぐらせて部屋を見回

しているようだったが、

ぱっと手を広げて空中を飛び始めた。

こうもりだわ、とシルフィンは心の内でつぶやく。

深い森に囲まれた自然豊かなこのゲールベルグでは、こうもりなんてめずらしくもなかった。しかし、薄く光るこうもりは見たことも聞いたこともない。

不思議なこうもりは、部屋の天井近くをぐるぐると数回まわるように飛ぶと、天蓋ベッドの右側、暖炉の光によって暗い影になっている場所に吸い込まれるようにして姿を消した。

シルフィンの心臓は口から出るんじゃないかというほどドキドキしていた。

こうもりが消えてしばらく様子を見ていたけれど、再びこうもりが現れる気配はない。

思い切って布団を跳ね上げシルフィンはベッドを降りる。

やわらかい毛の絨毯を裸足で踏み、恐る恐るこうもり消失点と思われる場所に近づく。

濃い闇に覆われたそこは目をすがめても、はっきり見えない。

仕方なくシルフィンはベッド側のチェストに向かい、上にのる銀色の燭台を手にとった。暖炉に行つて、燭台の太い口ウソクに火をつけ、早足で元いた場所に戻つた。

燭台の明かりをたよりに、壁を調べ始める。

壁にはこうもりが通れるような大穴は開いていない。手でぺたぺた触つてみても普通の壁。壁は、床から四分の一くらいはレベルンの銚色の木を長方形板が貼られていて、その上は壁紙が貼られている。境界線は細い横木が配置されている。

「穴がない。こうもりもない。さっきの、夢？」

か細く口に出していた疑問を、すぐさま首を振って否定した。だ

ってすぐ先ほど見たのだ。眠ってなんていなかった。

試しに、空いている手で頬をつねってみる。痛い、やっぱり夢じゃないじゃない！

そう思っていると、飴色の板壁に染みらしきものにシルフィンは気付いた。

燭台の明かりと自分の顔を近づけて見ると、それは手のひらよりも小さな印だった。円形の輪の中に象徴的な絵が、地の飴色よりも濃い茶色の線で描かれていて、ちよつと見では、目立たない。

その印を見てシルフィンは大きく目を見開いた。

——あ、これ。これ知っているわ。

チェストへ戻り、その二番目の棚から革張りの小箱を取り出す。箱を開けると、銀色の鎖に希少な精霊石一つと、小さな宝石たちを連ねたブレスレットが現れる。

去年シルフィンは8歳の誕生日に母親オデットからもらったものだ。

右手でブレスレットを持ちあげ、厚さは薄く、ほぼ真円カットされた新緑色の精霊石の中をのぞくと、石の中に先ほどとそっくりな印が半透明に浮き上がっていた。

——似ている。というか同じ？

同じ印か比べてみようと思ひ、右手にブレスレット、左手に燭台という姿で壁に戻る。

壁の印にブレスレットの印を重ねた——その時。

同調するように、二つの印が明滅し、ひと際パツと光ると同時にシルフィンの体は暗転した。

1（後書き）

誤字・脱字や感想はお気軽にどうぞ。

気が付くと暗い通路に立っていた。

素足が冷たい石床の存在を伝えている。驚き過ぎて、悲鳴も喉に張り付いていたシルフィンだったが、はっとして周囲を手元の燭台を高くかかげて確認する。そこは石壁に囲まれた階段だった。天井が高く小さな灯では見通せない。

目の前には、下につながる階段。右にゆるく曲がっているようだ。つた。

「……」

訳が分からなかった。さっきまで自分の部屋にいたはず。

左の壁に、ぼおっと白く印が浮かび上がっている。

それは、先刻瞬いた印と同じもの。

ある考えがシルフィンの頭に浮かぶ。

「もしかして、隠し通路？ この印が扉の鍵？」

王家には緊急事態のために隠し通路の一つや二つはある。シルフィンも何個か知っている。

しかし、この隠し通路の存在は知らなかった。こんな方法で開くものも。

下から冷たい風がシルフィンの足首をなでつけて、ついでのように口ウソクの炎を大きく揺らした。

氷のように冷たい風。春先と言えゲーベルゲルグの夜はまだ冬の寒さを残している。

シルフィンは身震いした。薄いペラペラの寝間着しか着てない上に石床に裸足なので当然寒すぎる。

シルフィンは頭をめぐらしたが、淡く光るこうもりが階段の上へ行ったか、下へ行ったかわからなかった。

こうもりの行方はあきらめるしかない。

新しい冒険の扉が目の前で閉じてしまったようで、シルフィンは

残念でならなかった。

—— 今度見たらどこに行くのか追いかけよう。怖いけど、おばけや幽霊じゃないみたいだし、光るなんて不思議だわ！ 運が良ければ捕まえられるかも。きつとお母様とお父様、サザンを驚かせられるわ。そうしたらうんと褒めてもらえて、いつもの“忙しい”を聞かずに、かまってもらえるかも。

いい考えだとにこにこしながら、シルフィンが部屋に戻るために壁の印にプレスレットを近づけた。

ゲーベルゲルグはここ数日でだいぶ暖かくなってきた。
窓からは金色の陽射しが射し込み、ぽかぽかしている。

ゲーベルゲルグ城の一室、春の恵みを受けている少女に注意が飛んだ。

「シルフィン様、淑女としても、王国を継ぐものとしても、講義中に居眠りをするとは恥ずかしいことですぞ」

と白い髭をたくわえた老人は言った。

うつらうつらしていたシルフィンははっとすると、

「ごめんなさい、ヘルガー先生」

と素直に謝った。いつもわがままを通すシルフィンだったが、この教師だけは別だった。彼はシルフィンがわがままや態度が悪いとなると次の講義までに宿題をたくさん出すというしつぺ返しをしてくるのだ。もちろん出された宿題をやってこない場合も宿題増量だ。「では、ちゃんと学習をして頂けるのですね？」

長い髭の下からもしよもしよとしゃべる。

同意のうなずきを返しながら、シルフィンはあくびをかみ殺した。あの不思議なこうもりが現れてから1週間が経っていた。あれから夜になるとサザンが自分の部屋へ下がるのを見計らって、窓の外を夜遅くまで見ていて寝不足なのだ。

そんなに熱心に待っていたのだけれど、あのこうもりは影も形も見られなかった。

——あれって、どんなこうもりだったのかしら？　もしかしたらヘルガー先生は知っているかもしれない！

そこで、シルフィンは先生に聞いてみることにした。改まった口調で言う。

「ヘルガー先生、先生は高名な博士よね。私最近とても気になることがあるの。質問してもよろしいかしら？」

「ほうほう、そうなのですか。シルフィン様から熱心に質問とはめずらしい限りですな。わたくしでわかることならなんなりと」と、ヘルガー先生は、ほうきのように長くたれ、半ば目を隠している白い眉毛をちよつと持ちあげて言った。

「あのね、先生は光るこうもりというのを見たことがあるかしら？　侍女の1人が夜に見たというのよ。私、その話を聞いてからというもの、気になってしょうがないの。ヘルガー先生は、伝承や歴史などの貴重な御本を収集しているのでしょうか？　見ていなくても、何か御存じかしらと思って」

シルフィンは少しウソをついた。自分ではなく侍女の話に変えたのだ。だってこんなに貴重な体験を人にペラペラ話すのめちゃくだし、もし変なことに首を突っ込んでいるなんて心配されたらこうもりの探索のじゃまをされるかもしれない。そうしたら聞いた意味がなくなってしまう。

「ほう、それで夜ふかしして空を眺めて、寝不足になっているというところですか」

ふおっふおっふおつと明るく先生が笑う。シルフィンは馬鹿にされている気がして、頬をぷくつとふくらませた。

「ああ、シルフィン様。またそのお顔。そのようなお顔をなさいますな。淑女らしくありませんぞ。まあ、馬鹿にしたわけではありませんよ。居眠り原因が微笑ましいと思っただけです」

先生は、シルフィンのぱんぱんに膨れた頬をしわだらけの人差し

指でつんとつつき、ぷすつと空気が出たのを確認するとほほ笑んだ。礼儀を重んじるヘルガー先生だけれど、たまに周囲が理解できないお茶目な事をする。

あつけにとられてぽかんとするシルフィンをよそに、ヘルガー先生は渋い顔をしだした。

「光るこもりですか……光る動物というのは……うつむ」

白い髭を片手でなでながら、彼は続けた。

「光る動物というのは、古書に記述があることはあるのですが、2つの意味があるといえますな。神の使いとして1つ、魔の使いとして1つ。すなわち、吉凶を司ると考えられる生き物です。」

歴史書の中には、光る動物があらわれた後、国が滅びたという例もありますし、逆に国の危機を知らせた光る動物というのものもあります。

昔から人々は畏敬の存在からの使いとしてとらえているといえましょう」

シルフィンは驚いた。そんな凄い存在なのか、あのこもりは！「しかし、それがゆえに勘違いもありましてな。300年前の記述によれば、ある男が光る狼を見たとき大騒ぎをし、街中が混乱に陥ったことがあります。実はその男、しこたま酒を飲んでいて酔っ払っていたとか。酒が顔に出ない者だったのでしょうか。周りの人々が真実と受け止めて、それはもう大変だったとか。」

またある記述では、確か150年前の西にある国でしたかな、村人が森で光る鹿を見たことがあります。しかし、実際に調べに行ったその国の博士の話では、ヒカリゴケにまみれた鹿を発見し誤解だったことが判明したとか。

伝承の生き物ですから、その伝えられている事が真実なのか、はたまた迷信なのか、わたくしにもわかりかねます」

「ふーん。先生の御本には変な話ばかりがのっているのね。では、侍女の見たものは勘違いだと？ ヘルガー先生はそう思うの？」

不満そうに言うと、ヘルガー先生は困ったように目をしばしょ

ばさせた。

「それはわかりませんな。調べてみなければ。その侍女はどなたなのですか？ わたくしも直接話を聞いてみたいものです。伝承が真実であれば、この国に何かあるやもしれませんし。王様や王妃様にも一応は報告した方がよろしいでしょうな……」

シルフィンはあわてた。そんな話の流れになるとは思っただけでなかった。

どうしよう！ 本当のことを言えば、こうも探索はできなくなることも間違いなしだ。

「実は……侍女は、マーサなの。マーサって、なんだって大袈裟に話す癖があるじゃない。しかもドジだし。私もマーサの言うことだから、ちよつと疑うところはあったけれど、光るこうもりなんて聞いたこともないから、とつても興味が出ちゃって。」

悪気のない勘違いだったのかもしれないのに、私が先生に話したこと、大騒ぎになってマーサが罰せられたりしたら、私とても悲しくなると思うの。

だから先生、マーサはそつとしいてあげて。先生が真剣になつて話を聞きに行っても、驚いて知らない顔をすると思うわ。きつと話が大袈裟になると思わなくて、私を楽しませようとした作り話だったかもしれないし」

苦しまぎれに、ありもしないことを口にのせる。でも、意外と上手い言い逃れではないかとシルフィンが考えていると、

「ほほう、そうでございますか。いつもは我がまま一杯で、侍女たちを困らせているシルフィン様からは想像がつかないお優しいお言葉ですなあ。何か企んでおられるのかな？ それともわたくしが知らないうちに、姫様はご成長されたのでしょうか？」

のんびりとした手つきで白髭をなでるヘルガー先生だったが、その目はキラリと鋭く光っている。

シルフィンは先生鋭いわねと内心舌打ちをした。それでも、そんな思いをおくびにも出さずに言っただけだった。

「何をおっしゃるの、先生！ 私は今だって立派なレディよ！ お母様の娘ですもの、同じように優しく寛大なのは当然でしょ」

顎をつんと上げてすましているシルフィンを、ヘルガー先生はうるんな目で眺めていたが、

「そうであつてほしいものですな、本当に」と失礼な一言を付け加えて滞っていた授業に戻っていった。

真つ暗な中、月明かりを頼りに窓の外の景色に目をこらす。

高台に建つ城からは深い森が黒々と眼下にのぞめ、紺色の空に清浄な光をたたえた下弦の月が見えている。

ガラス窓に頬を張り付けて目線を真下に動かすと、丘にへばりつくような城下町の明かりがある。

「夜遅いというのに、町の人も夜更かしね」

仲間を見付けたと言うように、ふふつとシルフィンは頬笑み、小さな声でつぶやく。隣の乳母を起こしたら大変だ。

暗い部屋で毛布にくるまりながら、今日の講義での事を思い出す。先生の話聞いてますますあのこうもりに興味が出てしまった。

しかし、窓辺で陣取ってからもう一刻以上経っているが未だこうもりは現れなかった。

眠たさに目をこする。

今日はもう現われないのかと思い始めたとき。

紺色の空、遠くの方に麦粒ほどの淡い光が浮かんだ。

シルフィンは窓に顔を勢いよく張り付け、目を凝らして見ると、光はじぐざくと空中をこちらに進んでくる。

——きつと、あのこうもり！

うれしさに大きな声を上げそうになった口を手で押さえ、あわてて毛布共々窓辺を離れて、ベッドにもぐりこんだ。

布団を頭までかぶるのと、窓ガラスに何かがぶつかるのとはほぼ同時だった。

カタカタと何回か音がして、前と同じく縦長の窓が細く開いた。淡い光を宿したこうもりは、じつとして部屋の様子をさぐっている。

シルフィンもここは慎重に目を閉じて寝た振りを決めこんだ。しばらくすると、窓を閉め部屋の中をぱたぱたと飛びまわる音が

聞こえてきた。

薄眼を開けると、天井付近に円を描くように回って飛んでいる。そしてこうもりは意を決したように壁に突進していくと、ふっと消えた。

消えたのを確認したシルフィンは勢いよくベッドから飛び出した。用意していたピンク色の室内用布靴と分厚い毛織の外套を寝間着の上に素早く身に付け、手に銀の燭台を持つ。

大慌てで暖炉から火を燭台に移し、印がある壁にたどり着くと手首のブレスレットをかけた。

真つ暗な回廊に入ると、シルフィンはこうもりの行き先を探した。光るこうもりが階段を下る方へ向かっているのが目に入る。

高い天井の近くをパタパタと飛び、右に曲がる壁に隠れる寸前だった。

シルフィンは急いで後を追いかけた。

どこからか入った冷たい風が吹き抜けて行くと、手元の燭台の炎がゆれる。作りだされた奇妙な影達がシルフィンのまわりをかこみ不気味に踊った。

怖かったけれど影達を見ないようにして、ひたすらこうもりに気付かれないように、遅れないように階段を下って行った。

階段はらせん状に下にゆったり降りて行く。

ひたすら段を踏み外さないように気を張り、暗闇の中小さな灯で歩いているので、長い時間歩いている気がシルフィンにはした。

もう地下と思われるのに、階段は終わる気配を見せない。

しばらくして、行き先が2つに分かれ、光るこうもりは左側の階段を選び下りて行く。

シルフィンも左へ足を向け、遅れをとって豆粒大に離れてしまったこうもりを必死で追った。

——どこまで行くのかしら？ もう疲れてきちゃったわ。……あ

ら？ この通路みように明るいと思つたらヒカリゴケ。

灰色の石がみっちりつまつた壁には、所々に光るコケが生え、シルフィンの周りをぼうつと照らしていた。ヒカリゴケは深い森の暗くしめつた所に育つと言われているのにもかかわらず、どうみても城の壁に生えている。

——もしかして、ヘルガー先生が言っていたようなヒカリゴケにまみれただけのこうもりってことは……ないわよね。

ありえそうな事のでん末だったけれど、それだって追いかけて捕まえてみないとわからない。外套のポケットの中にはクモの系のように細い、投げて使う虫取り網が入っている。これで捕まえられるかどうかはわからないけど、ないよりましだ。

そんな事を思っていると、長い階段が終わり廊下と思われる空間に出た。

廊下の先には大きなアーチ状の入り口あつた。真黒い口をぱつくり開けているようにみえ、入り口の近くには松明が明々と燃えていた。じりじりとした燃える音と焦げくさい臭いが鼻をつく。

他には行くところがないから、あのこうもりは多分あの魔界の門のような先にいるのだろう。

ここへ来てシルフィンはおじけづいた。なんだかあの先から冷気のような雰囲気が出て来ているような気がする。肌は泡立ち、自分がネコならば毛が逆立っている。

それでも好奇心が先にたち、忍び足で入り口に近づくと入り口の横にへばりつき、中をのぞき見た。

天井が高い大きな広間だった。

広い部屋の床や壁にはこれまでの通路よりもヒカリゴケがびっしりと張り付いて、薄緑の光で満たされている。

——こうもり、いた！……何あれ？

薄暗い部屋をこうもりは飛んでいた。

ただそれだけではなかった。

思わず心の中で疑問を叫んでしまうほど変わったものが部屋の中

にはあつたのだ。

広間の中央に見たこともないような巨大な鉄の檻^{おり}。
言うなれば、大きな鳥かご。

そして、その中は空ではなかった。

顔が強張り、冷や汗が額に浮かぶ。

あんなもの見たことがない。あれは何？という疑問符が頭の中を
駆け回る。

そして異質な雰囲気を出しているのは間違いなく檻の中にいるもの
だった。

もう一度、恐る恐る入り口からのぞき込む。

檻にとらわれた存在は人ではなかった。

大人の背丈よりも大きい巨大な梟^{ふくろう}。

光をたたえて輝く白銀の羽根、脚には鋭いかぎ爪、そして猛獣の
ように黄金に輝く瞳を持っていた。

そして、頭の部分は人のそれだった。

銀色の卷毛は渦を巻く水のように背の半ばまで流れて覆い、肌は
真っ白な雪のよう。今までみた王宮の美男美女など比べることもで
きないほど整い過ぎた美貌。

白銀の神、天上に住まう神々のけん属、そんな言葉がぴったりだ
と思っただ。

壁から少し顔をのぞかせていたシルフィンは、全身がびくりとは
ねる。

金色の煌々と光る目がこちらを捕らえていた。

胸の鼓動が暴れ危機を知らせている。

猛禽類に狙われるうさぎさながらに素早く逃げなければならない
のに、体が強張^{こわば}って身動きできない。

視線が頭の奥まで突き刺さるようだった。

渾身の力をつかって、まぶたを閉じるとふっと強張りが緩む。

シルフィンは急いで思うように動かない足を叱咤し、きびすを返そうとした。

「きゃあ！」

振り返った途端に、こうもりが頭めがけて攻撃をしかけてきた。キーキーと耳障りな音を張りあげて、爪や牙でシルフィンを追いたてるように攻撃してくる。

「やめて、やめて！ 何するのよっ！」

悲鳴を上げながらあいている手を振り回しこうもりを叩き落とそうとしたが、光るこうもりは器用に手を避けてなおも向かってくる。シルフィンは追い立てられ、部屋に足を踏み入れていた。

そうして気付いた時には部屋の中で、大分檻に近付いていた。

黄金の瞳の人ならぬ者が、じっとこちらを見ているのは全身で感じる。

背中に汗が流れ、圧迫される感覚が襲う。どうすればいいのか混乱した頭で必死に考えたけれど、良い考えが浮かぶはずがなかった。こうもりが目の前をかすめる。攻撃を止めたが警戒するように自分の周りを飛び回っていた。

すると、静かな空間に美声が響いた。

「珍しい者をつれて来たものだな」

その言葉に反応してこうもりがキーキーと甲高い鳴き声をあげて檻の主の元へ飛んでいく。鉄の柵をすり抜けてこうもりは主の伸ばされた翼にとまり、懸命に何か訴えているようだった。

シルフィンは束の間ぼうつとしていたけれど、今が逃げられるチャンスだと思いいたった。

気付かれないようゆっくり首を動かして、後ろの出入り口をかえりみた。

「……」

絶句したくもなる。門には光るこうもりの仲間とおぼしき数匹がすでにぶら下がり、きつい目でこちらを睨んでいた。出口はその門ひとつしかないため、逃げ道がなくなった。

青い顔をして正面を向くと、人ならぬ者は面白そうに目を細めてこちらをながめている。

「さて、私にとってこれは好機なのか、厄介事なのか。お前はジークフリートとオデットの一粒種の娘だろう？　こんなところに何用か？」

逃げ場のないシルフィンに余裕の部屋の主の声がかけられたのだ。
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4852o/>

ゲーベルゲルグの夜

2010年11月10日01時25分発行